

# 兪鎮午作「金講師とT教授」小考

——T教授とその他の登場人物を中心に——

白 川 春 子

## I はじめに

以前、筆者は、兪鎮午<sup>1)</sup>(1906~1987)の代表作である「金講師とT教授」について、初出の《新東亜》<sup>2)</sup>版(1935.1. 朝鮮語)と、これまであまり取り上げられることのなかった日本の文芸雑誌《文学案内》に掲載された日本語版(1937.2. 作者自訳)との比較、検討を試みたことがある。<sup>3)</sup>その結果、両者は全体の構成は変わらないものの、全面的に書き改められていることが確認され、特に主人公、金講師の描写については、顕著な違いが認められた。すなわち前者では、臆病で従順な金講師が不安の中で混乱する姿がやや滑稽に描かれているのに対し、後者では、冷静で批判意識の強い金講師が、追い詰められながらも虚無的な強さを見せていることがわかった。これは作者が日本の読者を意識して、主人公の性格設定を変えたものと考えられる。すなわち、作者が植民地下の朝鮮で苦悩するインテリ青年の姿を前者のように自嘲気味に描くことをためらったのではないかと推測されるのである。

本稿では、前回、言及できなかったT教授やその他の登場人物の描かれ方について、初出の朝鮮語による《新東亜》版と《文学案内》<sup>4)</sup>に掲載された日本語版との比較・検討を試みることによって、前稿を補完し、両者の人物設定の違いをより立体的に把握することを目標としたい。

## II 作品の検討

本稿では、前稿の記述にならい、作品「金講師とT教授」のテキストについて、《新東亜》版(1935.1. 朝鮮語)をA、《文学案内》の日本語版(1937.2. 作者自訳)をBとして、主にAとBを比較しながら、作品を検討する。またBを底本としている『兪鎮午短篇集』(1939.7. 学芸社、朝鮮語)所収のものをCとして、BとCが異なる場合は、註で指摘することにする。<sup>5)</sup>

### 1 T教授の描写について

AとBとを比較すると、前稿で指摘したように、Aに比べBに圧倒的に加筆部分が多く、より緻密な描写が見られた。T教授の描写についても同様なことが言える。まず、金講師(金萬弼)がT教授と校長室で最初に出会う場面を見ると次のようである。

肥った男は校長の言葉が終わるよりも前に腰をかがめてまた出て行った。(A, p.222)<sup>6)</sup>

肥った紳士はちらつと金萬弼の方へ眼をやり、みかけによらず軽々と腰をかがめてそのまま出て行った。  
(B, p.14)<sup>7)</sup>

「私がT一でございます。」と言いながら肥った男はとても親切そうに腰をかがめた。(A, p.223)

「T一でございます。どうぞよろしく」T教授は町の商人のやうに腰を低くして金に御辞儀をした。  
(B, p.15)

このようにAでのT教授の描写がやや単純なのに対し、Bの方は描写がより緻密で具体的であり、視覚に訴えてくるものがある。またAでは「とても親切そう」とあるのに対してBでは「町の商人のやうに腰を低くして」とあり、T教授の描写に微妙な違いがあるのがわかる。

次に、金講師の最初の授業の前に、新聞室でT教授が金講師に忠言する場面を比較してみる。

T教授は新聞室に入って来て金講師のそばに座りながら「すぐ今度の最初の時間があなたの時間ですね。…(中略)…わが校で言えば学生が混じっているからより一層やっていくのが難しいんです。…(中略)…」T教授は話し終えて豪傑のように笑いを爆発させた。(A, p.224)

T教授はのつそりのつそり金に近づいて、「今度、あなたの時間ですね。…(中略)…校長も心配して居られるので…(中略)…学生操縦術といったものについてまだお考へになつたことがないと思ふんですがね。とかく先生稼業といふものは、傍から見た目には神聖なものかも知らないけど結局まあ一種の<sup>マツ</sup>人気商売なんでね。…(中略)…あなたと私との間だから云ふのですけど」とT教授は、あたりを<sup>マツ</sup>みまわして声を低め、「昨日校長先生も一寸云つておられましたが、ここは<sup>マツ</sup>内鮮共学でしょ。朝鮮人の先生はあなたが始めてだから内地人の学生がどう出るかこれが心配なんですよ。また妙なところからそんなことが機縁で学生の間にごたごたが起つても困るし…(後略)…」(B, pp.18~19)<sup>8)</sup>

以上、Bの加筆部分に注目して引用してみた。このように、Aに比べてBでのT教授の言葉は、より詳しく書き込まれている。またBで当時の朝鮮の学校の状況や金講師の立場についてより細かな説明がなされているのは、やはり日本の読者を意識してのことであろう。さらにAの「豪傑のように笑いを爆発させた」という表現とBの「あたりをみまわして声を低め」という表現などから、対照的なT教授の性格設定に気付かされるのである。この後、最初の授業を終えた金講師にT教授が学生について忠告する場面があるのだが、ここでもAとBに違いが見られる。

鈴木という奴…(中略)…教室では悪ふざけばかりして、そしてそのうえ品行がよくなくて、女学生に手紙を出すのが常です。(A, p.225)

鈴木といふ奴…(中略)…こんな奴は決して卒業させてはいけません。卒業さすもんか。…(中略)…それから朱享植、乾、高橋、崔、朴、松本……馬鹿な奴たちだ。よくも低脳がそろつてゐる…(中略)…学生といふものは要するに僕たち教師の×なんだ。(B, pp.19~20)

このようにAに比べBの方がT教授の学生を批判する言葉がより過激であり、T教授の学生に対する敵意が強調されているのである。そしてこの結果、前稿で述べた<sup>9)</sup>ように、Bでは金講師のT教授に対する不信感と憂鬱がより深まることになる。

数日後、金講師が就職のお礼にH課長を自宅に訪ねた時、T教授に出くわすのだが、そこでの描写もBに加筆部分が見られる。

金萬弼がH課長の家へ入って行く路地を曲がろうとする瞬間、背後から他の人の足音が聞こえた。頭をくると回すとすぐ背後にまで来たその人の顔とほとんどぶつかりそうになった。…(中略)…T教授は手に持っていた物を一度さっと持ち上げて見せて勝手口へ消えた。(A, pp.225~226)

H課長宅の路次<sup>マツ</sup>を曲がらうとすると、すぐ背後に忙はしく歩いてくる足音が聞こえたので、金はひよいつと後を振り向いた。と、後からやつて来た人は大分周章<sup>マツ</sup>てゐて、前に歩いてゐた金に気がつかなかつらしく、二人の顔は、殆んどぶつかる位に近くなつてゐた。<sup>10)</sup>…(中略)…不意に金講師に出會はしたので、ちよつとへどもどする形だつたが…(中略)…二三步路次<sup>マツ</sup>を奥の方へ入つて行つた。が、また何を

考へたのか金萬弼の方へとつて返し、金の肩を今一度ぼんと叩いて…（中略）…抱えてゐた包みを片手で金の目の前に翳してみせ、路次<sup>ろじ</sup>を入り、つかつかとH課長の勝手口から中へ消えた。

（B, pp.20～21）（下線は筆者）

このようにAに比べてBの方がT教授に対する描写が緻密であり、下線部を見るとT教授の慌てている様子が強調されているのがわかる。この後、勝手口から出て来たT教授の描写もAでは「とても威厳のある態度を回復していた」（A, p.226）とあるのに対し、Bでは「いつものゆつたりとした足どりを恢復してゐた。怒ったやうなむづかしい顔になつてゐた。」（B, p.21）<sup>11)</sup>とあり、Bの方がより具体的な表現になっており、Aの「威厳」が与える語感とは異なっているのである。

H課長の家を出た後、二人は「セルパン」という店に入るが、そこでのT教授の描写にも違いが見られる。まず、店の女が声をかけたのに対し、Aでは「何の意味なのかT教授は口に指をあててシーシー言いながら、しかしにこにこ笑いながら隅のテーブルを取った。」（A, p.226）とあるが、Bでは「T教授はじつと唇に指をあてて沈黙を命じ隅のテーブルへ席をとつた。」（B, p.21）とあり、前者が明るい印象であるのに対し、後者は何か暗い態度である。またAでは「T教授は意味のわからない高笑いを大きくしてから」（A, p.226）とあって豪放な感じを与えるが、Bでは「今度は狡るさうに目を瞬いてみせた。」（B, p.22）<sup>12)</sup>とあり、狡猾な感じとなっている。さらにAで「T教授はお茶を一息に飲んで今度は上等のウイスキーを注文しながら」（A, p.226）とある部分が、Bでは以下のように加筆されている。

T教授は熱いティをふうふう吹きながら答へた。お茶を一気に飲み干すと、今度はウキスキーを注文した。ウキスキーを注文した。<sup>13)</sup> ウキスキーを立てつづけに二三杯飲んだところでT教授はにやにや笑ひながら切り出した。…（中略）…T教授の話つ振りや薄笑ひの中には、お前の秘密は俺にはすつかりわかつてゐるんだぞといふ意味の表情が現はれてゐた。（B, p.22）

このようにBでは、より緻密な描写がなされ、T教授のいやらしさがはっきりと表現されているのである。また「セルパン」でのT教授の話の中には次のようなくだりがある。

あなたがお書きになった「ドイツ新興作家群像」という論文を読みました。…（中略）…ドイツ文学についてあなたほど研究と理解が深い人は日本中でも少ないでしょう。…（中略）…今後ともたくさん書いて下さい。（A, pp.226～227）

あなたがお書きになった「ドイツ左翼作家群像」といふ論文を僕は読んだんですよ。…（中略）…ドイツ文学についてあなた位研究の深い人は内地にだつてさう澤山はゐないでせう。…（中略）…朝鮮の人々の中からもぼつぼつあなたのやうな偉い人が出て来るやうになつたのは嬉しいことです。これからも大にやつて下さい。（B, pp.22～23）

Bの加筆・変更部分は、植民地朝鮮を意識させる表現である。また「論文」の題名を見ると当局の検閲が朝鮮ではより厳しかったであろうことが察せられるのである。

一方、「セルパン」を出たところの描写は、AとBでは対照的である。Aでは「セルパンを出て来た時には二人共ほろ酔い気分酔って…（中略）…T教授はとても陽気な態度で先に立って」（A, p.227）とあり、陽気なT教授と共に金講師もほろ酔い気分なのであるが、Bでは「「セルパン」を出ると金は一刻も早くT教授の傍を逃れたかつた。」（B, p.23）とあり、金講師はT教授に嫌悪感を示しているのである。この後、二人はおでん屋で飲んで帰るのだが、Aは「おでん屋を出た時には二人共、千鳥足だった。」（A, p.227）とあるのに対し、Bでは「二人はおでん屋を出た。金萬弼もかなり飲んでゐたが気は却つて冴えてゐた。」（B, p.23）とあり、Aに比べてBの金講師は冷静であるのがわかる。

次に帰りのタクシーの中での会話にも違いがある。

T教授は金萬弼の耳に口を当て「…（中略）…O君にも注意したまえ。」と謎のようなことをささやいた。Oという人は去年の春からS専門学校のドイツ語の講師をしている人だった。…（中略）…考えればライバルの立場にあるようでもあるが、Oの優越な地位はとうてい金萬弼の相手ではなかった。…（中略）…金萬弼がわけがわからず返事ができないでいると、T教授は突然からから笑って「いや、何、別に気にすることはありません。ただそうだという話ですよ。」（A, p.227）

T教授は金萬弼の耳もとに口をあて、「…（中略）…S君なんか警戒した方がいいぜ」と謎のやうなことを囁いた。…（中略）…Sといへば前年の春満洲工科大学の予科からS専門学校に転じた人でこの春教授になる筈だったが何かの事情で——その裏にはT教授一派の策動があつた——教授になれず、これを不平にしてゐる人だった。そんな事情は金にはわかつてゐなかつたし、同じドイツ語の教師であるから自分に関係づけて考へてみる外なかつたが<sup>14)</sup>…（中略）…金が黙つてゐると、T教授は大袈裟に笑つて、「いや、何にもそんなに考へなくたっていいよ。ただね一寸いつてみたんだよ。もともと奴は教授になんかなれる柄ぢやないんだ…（中略）…だがね、実をいへば奴は君の四時間をととても欲しがつてゐたんだよ。それが貰へたらこの秋から教授になれることになつてたんだよ。とかく奴は陰険だからね。気をつけた方がいいぞ」（B, p.24）

このようにT教授が金講師に接近して利用しようとしていることが暗示されているが、Aに比べBの方がより詳しく表現されていて、S専門学校内の人事抗争問題がより明確に示されているのである。

このT教授の話の直後の描写にも次のような違いが見られる。

「そうですか」金萬弼はうなずきながらとんちんかんな返事をした。何か恐ろしい悪夢に捉えられたようで、一刻でも早くT教授のそばを離れたかった。（A, p.227）

金は恐ろしい悪夢中にとらはれてゐる感じがした。とたんにT教授が、ストップ！と怒鳴つて、車はギーツと急停車した。金の下宿へ入る露路の前だった。（B, p.24）（下線は筆者）

このように両者を比べてみると、Aがやや滑稽味を持たせて描かれているのに対して、Bでは下線部の動的な表現を通して金講師の不安な気持ちが間接的に効果的に表現されており、より洗練された描写になっていることがわかる。

その後、T教授は金講師に「校長に何か持って行った方がいい」と忠言するのだが、それに対する金講師の反応の仕方にもやや違いが見られる。

T教授はいったい何の動機で自分にそんな話をまた聞かせてくれるのだろうか。親切だろうか。嘲弄だろうか。しかしそれはとにかくT教授のその言葉で校長が金講師に対してとても不快に思っていることは推測することができた。（A, p.231）

T教授の性格やその他一切の事情を考へてみるに、彼が心から金のためを思つて忠言などしてくれる理由の一つもないのだ。若しさうだとしたら彼の忠言はその実、世馴れしてない癖に食へないところのある金講師を嘲弄かつたものに過ぎないのだ。が、また考へ直してみると、その忠言はもつと意味深長で、「校長はお前を憎んでゐるぞ。今のうちに考へ直さなければ首だぞ」といふ脅迫の言葉にもとられた。（B, p.29）

このようにAでは、T教授の真意が親切か嘲弄かわからないとあるのに対して、BではTの忠言を嘲弄か脅迫と捉えていて、T教授に対する不信感が強調されているのである。（T教授のこの忠言を受けて金講師は校長を訪ねるために菓子折まで買うが悩んだあげくに行くのをやめてしまう。）

次にT教授について詳しく述べられている注目すべき場面があるので、多少長くなるが引用してみたい。

T教授は冬の間に一層太ったようだった。どんなに寒くてもきつくて苦しいとズボンの下には猿股一つしか着ないで通したが、顔は油がてかてかして血色がよかった。教務室の中は彼の高笑いと騒ぐ声でいつもうるさかった。冬以降には彼は朝鮮の民俗を研究するといって、若い巫女と洋琴、伽耶琴を弾く妓生を豚の群れのように引き連れて歩き回った。学校では誰かを捕まえさえすれば巫女の神がかりする神秘についてきりのない熱弁をふるった。しかしT教授が若い巫女や妓生を連れて何を研究するのか誰も知らないように、また彼がいつも騒いだり笑ったりする裏で何を考えて何をするのか知る人は誰もいなかった。

(A, p.232) (下線は筆者)

T教授は、以前にもまして元気だった。この冬の寒さは格別ひどく、零下二十度といふ厳寒の日が幾日も続いたが、彼は猿股一つで押し通して来たと、教官室いつぱいに喋り立てた。顔には艶やかな血色が漲つてゐた。だしぬけに、彼はこの冬休みの間に、朝鮮の民俗について大に研究をしたと話し出した。

「ちょうど巫女を一人つかまへたんでね。いろいろと朝鮮人の信仰や迷信や冠婚葬祭の慣習や民間の風俗など調べてみたんだがね、なかなか面白いな。一つの民族を徹底的に理解しようと思ふなら、やはりこの方面から調べて行つた方が一ばん手取り早くて、面白いね。気狂ひを直さうと思つたら、神がかりの状態になつた巫女が東の方へ向いた桃の木の枝で患者をうんとこき懲らしたらけろつと癪つちやうんだつてね。面白いよ、有りもしない人の情事をふれて廻つた女には糞を喰らはすつてね。ははは、こりあなかなか合理的だよ。俺あ、朝鮮の女の肌がきれいな秘密が今度始めてわかつたよ。朝鮮の女は、夜寝るときあ必ず小便で顔を洗ふてんだ。そのうちに、俺も女房にこいつをやらしてみるかな。ははは、ははは」

(B, p.31)

両者を比較してみると、AはBに比べ説明的な表現であるが、下線部にあるようにT教授の謎の部分が強調されているのが興味深い。これに対してBはT教授の会話を通して表現されており、より洗練された描写になっている。またT教授の朝鮮人への蔑視や差別意識が強調されているが、謎の部分はない。またBではこのT教授の話に続けて金講師のT教授に対する強い反発が述べられている。(B, pp.31~32)

この後、T教授は金講師に今度はH課長を訪ねるように忠告するのであるが、この場面でもやはりAとBには違いが見られる。まずAでは、「ある日、T教授がまた例の人のいい笑みを浮かべて金講師を訪ねて来て、家へ帰る途中ちょっとどこかへ一緒に行こうと誘つた。…(中略)…二人はいつか一緒に行つた「セルパン」という喫茶店に行つた。」(A, p.232) (下線は筆者)とあり、T教授と金講師はまだ一緒に「セルパン」に行くほど親しい(?)間柄である。これに対してBでは、「T教授が現はれて、今日一寸話があるから、今度の授業が終つたら教務課へ来てくれないかとのことであつた。」(B, p.32)とあり、T教授と金講師の距離感を示すために場面設定を「セルパン」から「教務課」に変えているのである。そしてT教授は金講師に次のように語る。

「昨夕、H課長に会つたら、金さんにちょっと会おうと言つてました。——うちの校長の性分は私がよく知っているから、この前も何か菓子折でも持って行けて、たぶんそう言わなかつたですか。ははは、金さんは、失礼な話ですが、まだ世の中がわかっていないっていうんですよ。何の話をどう聞いたのか私は知らないが、なにか空気がちょっと陰悪な感じだったんですよ。たぶんH課長もこのところは一度も訪ねて行ってないでしょ。それもみんな金さんが未熟なせいだということですよ。金さんとしてはH課長の推薦で入つたんだし、うまくやりさえすればだんだん時間ももっと取れたはずなのに、なぜ「へた」をすることかです。」T教授は心から金講師のことを同情する表情を見せた。考えればそれもそうだが、金萬弼にはなぜかTの話が頬をたたいて背中をさするペテンのように思えた。」(A, p.232) (下線は筆者)

「…(中略)…昨夕僕は久しぶりでH課長の家へ遊びに行きましたがね。H課長は、どうもね、あなたについて何か変なことをきいて気持を悪くしてゐるらしいんですよ。何をきいたのかは僕も知りませんがね。それについて、一寸僕からあなたに云つておきたいことは、実にうちの校長のことですがね。校長はああ

いふ性質の人だし、あなたは何か校長の気持をひどく悪くしたんぢやないかと思ふんですよ。失礼な云ひ分だけど、あなたはまだ世の中といふものがわかつて居らん。世の中といふものは兎角理屈通りには行かないものですからね。上の人に対しては季節々々の贈物はともかく、ときどき御機嫌伺ひぐらゐやつておくものですよ。聞けばH課長もあれ以来訪ねて行かなかつたさうちやありませんか。H課長が云つてゐましたよ。あなたは僕と違つて始めからH課長の紹介で入つて来たんだし、あなたさへ旨く立ち廻つたら、行く行くは時間も少し貰へると思ふんだがなあ」(B, pp.32~33)

両者を比較すると、Aの曖昧なT教授の話に比べて、BのT教授の話はより詳しく具体的であり、校長がH課長に金講師のことについて何か告げ口でもしたかのような暗示がよりはっきり書かれているのがわかる。さらにAの下線部に注目すると、Aでは最後まで善意にも悪意にも取れるT教授の態度が描写されており、つかみどころのない得体の知れないT教授像が浮かび上がってくるのである。

金講師はT教授の話聞いて反発を覚えるが、結局、T教授の言うとおりに、H課長の家を訪れる。しかしそこで金講師の過去の秘密が暴かれるという破綻の形で作品はクライマックスの場面を迎える。<sup>15)</sup>そして作品の結末部分でT教授が登場するのである。

その時、隣の部屋に通じるドアが開いていつもと同じように春の波がちらちらするように顔全体ににこにこ微笑を浮べたT教授が応接室へ入って来た。(A, p.247)

と、ドアが開いて、H課長夫人がお茶を運んで現はれた。つづいて夫人の後に、いつもと変らぬ春の風のやうな駘蕩たる微笑を顔一ぱいに浮べたT教授が応接間へ入って来た。(B, p.34)<sup>16)</sup>

T教授の登場の仕方は、お茶を運ぶH課長夫人に続いて現れるというBの方が、より効果的であると思われる。また、Aの「春の波がちらちらするよう」な微笑を、Bの「春の風のやうな駘蕩たる微笑」に変えたのは、日本語としてより自然な表現を考えたためであろう。このようにこの作品は、最後の部分まで細部にわたって作者が書き改めた跡がうかがえるのである。

## 2 その他の登場人物の描写について

### ① 校長

まず、金講師が以前、官舎を訪ねた時の校長の様子について、Aでは「校長の顔つきがしわのよった栗のようだったので、まるで田舎の家の下男にでも対するようになかなか心易く思えた」(A, p.222)と滑稽な表現になっているのだが、Bでは「瘠せこけた威厳のない顔だったので、金は心易く話をすすめることが出来た。」(B, p.14)<sup>17)</sup>という表現に改められている。さらに金講師が最初に校長室を訪れた時の校長の姿は、Aでは「毒づいた蛇の鎌首のように頭をきゅっと後ろに反らして」(A, p.222)とあって、やはり滑稽な表現になっているが、Bでは次のように加筆・変更されている。

校長は眼をきらきらと鋭く光らせ、小さな頭をきゅつと後に持ち上げ、両脇を張り、今にもとびかかつて来さうな気構へを見せてゐた。その滑稽なほど誇張された固い表情は、彼なりに校長としての威厳をつくるつた姿ではあらうが、殖民地での<sup>18)</sup>永い属僚生活によつて敲き上げられたものに違ひなかつた。

(B, p.14) (下線は筆者)

このようにBでは、「蛇の鎌首」という戯画的な比喩の代わりに、具体的な描写がなされている。そして下線部にあるように、校長の姿に植民地朝鮮での小役人の姿が投影されているのが興味深い。これも日本の読者を意識して書き加えられたものであろう。

次に金講師に辞令を渡す時の校長の言葉を比較してみる。Aでは「これで君も…(中略)…わが校の一職

員であるから、わが校のために全力を尽くしてくれたまえ。それにわが校で××人を教員として使うのは君が初めてだから、より一層、注意するように」(A, p.222)とあるが、Bでは次のように加筆されている。

「ではこれで君も…(中略)…わが校の職員となつたのだから、わが校の特殊な重大な使命のためにせいぜい力を盡してくれなければならぬ。…(中略)…わが学校としては、君も知ってるやうに、朝鮮人の教員を使ふのは君が始めてだから、いろいろ君には深く考へて貰はなければならないことがあるのぢや。何しろ学生の中には内鮮人入り混つてゐることだし、いろいろと複雑な問題もある上に、当局としての一貫した教育方針もあるのだから、この点特に君には注意して貰ひたい…(後略)」(B, p.15)

このようにBでの校長の訓示は、より細かく具体的な表現であり、植民地下の朝鮮での学校現場の状況と朝鮮人教員として初めて採用される金講師の微妙な立場がよりはっきり示されているのである。こうした表現は、京城帝大で学び、卒業後、同校の助手、同予科の講師となった作者自身の異例の体験に基づくものであろう。<sup>19)</sup>

## ② 教員たち

まず、前稿(p.86)でも指摘したように、就任式の翌日の教員室(教官室)の描写を見ると、Aでは「朝の教員室は騒がしいことこの上なかつた。先生たちは元気な声で意味のない会話をからからと笑いながらとめどなくつづけた。」(A, p.224)と簡略に書かれているが、Bでは次のように大幅に加筆されている。

教官室に入ると、先に来てゐた教授が二三人何か元気よく話してゐたが、ちよつと話を途切り、金の挨拶に軽く答へ、それからまた元気よく話し出した。…(中略)…教授たちは金講師のゐることなど忘れたかのやうに自分たちばかり喋つてゐたが、話はどうやら昨夜の女のつづきらしかつた。教授が一人ふえ、二人ふえると教官室の騒ぎはますます大きくなつて行つた。彼等は天気のことや、撞球のことや、海水浴、ハイキング、甲子園の中等野球、銀ぶら、ステッキガール、その他ありとあらゆる無意味な話題について、田舎廻りの役人のやうな空太い声を出していつまでも喋り合つた。(B, p.17)<sup>20)</sup>

このようにBでは、金講師の存在を無視しつつ大声で意味のない会話をする教授たちの様子が詳しく描写され、その無意味さや下品さが強調されている。また次のような教員室(教官室)の描写もある。

教員室に行けば、皆が自分が優れていると金講師のようなものは横目ですらチラッとも見ないうゑに、いつだったかT教授が注意しろと言つていたO講師のその意地悪そうな顔も見るのが嫌だつた。(A, p.228)

教官室の空気も堪へられなかつた。教授たちの中金講師に対して先に口をきく人は一人もゐなかつた。彼等は終業の鐘が鳴つて教官室に帰ると、汚ららしいものを棄てるやうにチョーク、ボックスを荒々しくテーブルの上へ投げつけ、わいわい意味のない下卑たことを喋り出すのだつたが、金に対しては、お前みたいな奴は俺たちはてんで問題にしてゐないぞ、といはんばかりの態度をわざわざしてみせた。中でもいつかT教授に耳打ちされたことのあるS講師などは特にひどかつた。彼は金講師の顔を見ると明かに不快な色を浮べ、挨拶もろくにしなかつた。(B, pp.24~25)(下線は筆者)

金講師を無視する教員たちの様子がよく描かれているが、Bではより細かい描写がなされており、特に下線部の加筆部分に教官室の雰囲気が一層よく描き出されている。またBではこの後、金講師の次のような反発心について書き加えられている。

金は…(中略)…驕つた同僚たちに対する反撥の心がむらむらと起ることもあつた。出稼ぎの俗人ど

も！<sup>21)</sup> 貴様たちに親切にされたつて俺はちつとも嬉しくないぞ。(B, p.25) (下線は筆者)

ここで「出稼ぎの俗人ども！」とあるのは、植民地朝鮮で働く日本人に対する批判意識を象徴しており、非常に興味を引く表現である。

次にS専門学校の職員間の勢力争いについて、AとBでは設定が違っていることを指摘しておく。

今、勢力を握っている校長とT教授の一派…(中略)…に対抗して物理学のS教授とドイツ語のO講師が対立しているようだった。金萬弼は…(中略)…校長とT教授に対する反感のために密かにO講師の方に同情した。S教授は校長の反対派と言っても比較的しっかりした地位を持っていたが、O講師はうっかりすればこの二派の軋轢の犠牲になりそうで、寡婦の悲しみは寡婦がわかるようなもので彼に同情するのであった。しかしO講師の意地悪な顔と金講師の「ヒポコンデリー」は合わさる機会がなく過ぎた。

(A, p.230) (下線は筆者)

一方にはT教授を中心とする一派が校長を押し立てて学内の勢力を握って蟠居し、他方にはU教授、それにS講師などが正義派としてこれに対抗してゐるらしかった。S講師は校長と特別な関係があり、校長の招聘で満洲工大予科の席をわざわざ抛つて専門学校へやって来たのだったが、T教授の猛烈な離間策で校長との間を隔てられ、今に教授になれず、U教授の正義派にくつついてゐるのらしかった。金講師は…(中略)…心の中ではやはりU教授やS講師に味方をしてゐた。若しS講師がその民族的な偏見<sup>22)</sup>から出たらしい金講師に対する露骨な侮蔑と敵意さへ示さなかつたら…(中略)…S講師らの正義派に加担したかも知れない。(B, pp.28~29) (下線は筆者)

両者を比べてみると、Aは単なる主流派と非主流派の対立であるが、Bは主流派と正義派の対立という構図になっている。そしてAでは、金講師が自分と同じ弱い立場のO講師に同情しているのが興味深い。またBではAより詳しい記述になっているが、T教授の画策を指摘することで、T教授についてより批判的な書き方になっている。これはこの作品の行方を暗示する伏線でもある。さらにAでは「意地悪な顔」と「ヒポコンデリー」とあるのに対して、Bでは植民地朝鮮を意識した表現である「民族的な偏見から」の「侮蔑と敵意」とあるのが注目される。

### ③ 学生たち

S専門学校の学生たちの描写については、前稿(p.88)でも触れたが、まず、金講師の最初の授業の場面を取り上げることができる。

学生たちは予想よりおとなしかった。金講師はT教授の話もあったし、ひどく警戒したが、何事もなかった。質問があるたびに金講師は、おっ、さあ来たなと仇敵にでも会ったように身構えたが、わざと先生を困らせるための質問は一つもなかった。かえって新しく来た若い先生に対する好奇心からくる同情の色がみえた。(A, p.224)

金講師の處女講義は意外に平穩に済んだ。彼を困らせる質問どころか、学生たちは却つてこの新しい毛色の変つた先生の一語一語に好奇にみちた耳を傾けて聞き入つてゐるやうにみえた。金講師はT教授の注意もあつたことだし、また彼自身日本留学時代から嫌ひでもあつた<sup>23)</sup>長髪垢頭の国粹派蛮カラ学生たちに対して特に警戒したけれども、それらの学生も案外神妙に彼の講義を聞いてゐた。壇上に立つて喋つてゐると、だんだん度胸が据つて来て、肩を怒らし眉を顰めたそれら蛮カラ学生たちの虚勢張つた恰好が却つて無邪気にも可笑しくもみえた。(B, p.19)

このようにAと比べると、Bの方がより細かく学生たちの様子が描かれていて、当時の学生の姿がより視覚的に見えてきて興味深い。また教員たちが金講師を無視するのは対照的に、学生たちは金講師に対して好奇心を持ち、素直な関心を示していることがわかる。そしてさらにBでは次のような加筆部分がある。

しかしかうした職員間の空気とは違って、金講師の学生間の受けは悪くないやうであつた。日本人学生たちも何もしでかさなればかりか、却つて至極温順しくしてゐた。金はときどきドイツの左翼文学に関することなどちよつと切り出してみたりしたが、学生たちは興味を以て聞いてゐた。学生といふものは——と金は考へた——どこへ行つてもやつぱり同じものだ。これに元氣を得て彼はぼつぼつ一般的な新しい文学運動のことなど話したりした。(B, p.25)<sup>24)</sup> (下線は筆者)

このように金講師は学生に対してはうまく対応しているのである。また日本人教師に対しては「出稼ぎの俗人ども！」(B, p.25)と強い反発を覚えながらも、日本人学生については「学生といふものはどこへ行つても同じものだ」と考えているのが興味深い。

次に鈴木という日本人学生が金講師を尋ねる場面を取り上げてみる。<sup>25)</sup>

金萬弼が自分の家で新しく到着した「ルンド・シャウ」を開いていると、庭から「キンセンセイ」を呼ぶ声が聞こえた。戸をあけてみると…(中略)…鈴木だった。…(中略)…すぐ部屋に招き入れた。

(A, p.228) (下線は筆者)

新しく着いたばかりの「ルンド・シャウ」を寝転んだまま聞いてゐると<sup>26)</sup>珍しく庭に下駄の音がした。障子を開いてみると…(中略)…鈴木だった。…(中略)…すぐ<sup>オンドル</sup>温突に招き入れた。(B, p.25)(下線は筆者)

両者を比較するとBの方がより洗練された描写であり、「下駄」,<sup>オンドル</sup>「障子」,<sup>オンドル</sup>「温突」といった表現<sup>27)</sup>に日本の植民地である朝鮮を示唆しようという作者の意図を読み取ることができる。また、鈴木の話に関しては次のような一節がある。

鈴木はS専門学校の学生たちが大部分は何も考えずにその時その時の生活に陶醉していることを非常に攻撃して、それもすべて時勢の変遷、学校当局の過酷な××<sup>28)</sup>のせいだと不平を言った。

(A, p.228) (下線は筆者)

鈴木はS専門学校の学生たち、中でも日本人学生たち<sup>29)</sup>が殆んど全部、社会的文化的な事柄に対しては少しの関心もなく学校のノートばかり後生大事に暗誦してゐるだけだと憤慨し、これは要するに朝鮮といふ特殊な環境と、学生<sup>30)</sup>当局の苛酷な取締が作り出したものだと捲くしたてた。(B, p.26) (下線は筆者)

このように鈴木の話は、Bではより具体的な表現になっていて、「朝鮮といふ特殊な環境」にある「日本人学生たち」が「社会的文化的な事柄に対しては少しの関心もな」と批判してるのが注目される。これもまた、植民地朝鮮を意識させる表現であると言えよう。

#### ④ H課長

金講師に就職の世話をしたH課長については、まず、次のように描かれている。

H課長は朝鮮に来ている官吏としては、とても平民的で親切的な紳士だった。(A, p.225)

H課長は卒直で、<sup>マツ</sup>くだけた平民的な人で、好感のもてる人柄だった。(B, p.20)

このように好意的な描写がなされているのだが、金講師がT教授の忠告に従ってH課長を訪ねた最後の場面では、H課長は金講師に向かって次のように怒鳴りつける。

H課長はなぜか怒ったように座っていた。いつものあの温厚だった顔つきはなく、憎々しげな目で金萬弼をにらんだ。「何しに来た。」…(中略)…「会おうと言わなきゃ会わんのか。」…(中略)…だから朝鮮人は恩知らずだと言われるんだ。」…(中略)…「だますだなんて。君は私のところに来て就職を頼む時、何と言った。思想方面には絶対に関係ないと言っただろ。そう、そうやって人をまんまとだますのか。」

(A, p.232) (下線は筆者)

H課長は険しい目で金萬弼を睨らんでゐたが、金が恐る恐る近づくと、いきなり、「何か用があるかね」と怒鳴りつけた。…(中略)…「この恩知らずが！」…(中略)…「それでも君は俺を欺すつもりか」…(中略)…「ぢや俺の口からいつてやろうか。君は大学のとき××主義の団体に入つてゐたんだろ。こちらへ帰つてからも左翼の文芸運動に関係してゐたんだろ」…(中略)…H課長は今度はおろおろと泣き出しさうな声になって、「なぜ君はそれを俺に云はないで隠したんだ。…(中略)…朝鮮統治の役人が××主義者を学校に入れてそれでいいといふのか。<sup>31)</sup>俺は君に限つて間違ひはないと学校当局の強硬な反対を押し切つて、君を無理矢理に押しこんだのだ。考へてみたら、君を軽卒に信用した俺が悪かつたんだ。生じつか君たち朝鮮人の立場に<sup>32)</sup>同情したのがいけなかつたんだ、この恩知らずの、我利々々の——」

(B, pp.33~34) (下線は筆者)

このようにH課長の言葉を比べてみると、Aでは検閲を意識してか「思想方面には絶対に関係ないと言っただろ」という曖昧な表現であるのに対して、Bでは「君は大学のとき××主義の団体に入つてゐたんだろ。こちらへ帰つてからも左翼の文芸運動に関係してゐたんだろ」というようになりに詳しく具体的な表現になっているのがわかる。また後半のBの加筆部分では「朝鮮統治の役人が××主義者を学校に入れてそれでいいといふのか。」「朝鮮人の立場に同情したのがいけなかつたんだ」という表現が目立つ。作者は日本の読者が理解しやすいようにH課長の言葉をより詳しく加筆したものと考えられる。またそれと同時に、朝鮮の雑誌《新東亜》より、日本の雑誌である《文学案内》の方が、検閲の面で、より自由に書けた可能性があったと思われるのである。

#### ⑤ 「セルパン」の女とおでん屋の女

最後に「セルパン」の女とおでん屋の女の描かれ方について触れておきたい。まず「セルパン」の女については、次のように描かれている。

二人は「セルパン」というカフェに行った。…(中略)…「カウンター」に座った冷たい感じの女が、T教授がドアを入るや「アラ センセ(先生)。イラッシャイマシ。<sup>マツ</sup>スイブン オヒサシブリネ」<sup>33)</sup>と愛想が尽きるような声で叫んだ。(A, p.226) (下線は筆者)

二人が行つたのはM町の「セルパン」といふ家<sup>34)</sup>だった。東京は芝田村町の育ちだといふモダン女<sup>35)</sup>がカウンターに立つてゐて、小ざつぱりした家だった。女は二人が入ると「あら T——さん」と歓迎した。

(B, p.21) (下線は筆者)

このように「セルパン」の女の描写は、Aの方が滑稽な感じを与える。またBでは日本の読者を意識してか、「東京育ち」が強調されているのがわかる。

次におでん屋の女の描写について見てみる。

T教授は…(中略)…旭町のある路地裏の小綺麗に構えた「オデン」屋の「ノレン」をまくって中へ入って行った。ここにも彼は時々来るらしいのが、三十を越えるかどうかの妓生あがりのような女が、さっき「セルパン」のマダムが叫んだのとまったく同じ声で叫ぶのでわかった。ただ「センセ」を「センセイ」と発音するのだけが違った。(A, p.227) (下線は筆者)

T教授は…(中略)…貸座敷や料理屋などの並んでゐるA町へつれて行った。彼等が行ったのは、或る路次<sup>マ</sup>の奥の小さなおでん屋で、その道の通人だけが来るところらしく、芸妓上りらしい三十がらみの年増女がおでん台の後に立つてゐた。T教授はここでも顔馴染らしく盛んに女と巫山戯た口をききながら酒を飲んだ。(B, p.23)<sup>36)</sup>

このようにAでは「セルパン」の女と同様に、おでん屋の女もコミカルな描写になっている。それに比べてBでは、町や店の様子は、より細かく描かれている一方、滑稽な感じは消えているのである。

### Ⅲ. おわりに

以上、T教授とその他の人物を中心に作品を検討してみた。その結果、Aに比べてBに加筆部分が多く、より緻密で具体的な描写、視覚に訴える表現や動的な表現、会話体を効果的に使った表現等、より洗練された描写が見られたのである。またBの加筆・変更部分では、植民地朝鮮を意識させる表現が目された。これらは前稿で確認した結果とも一致するものである。

さらにT教授について見てみると、Aでは「親切」、「豪放」、「威厳」といった肯定的な表現が見うけられ、最後まで謎の部分の多い無気味な存在として描かれていた。これに対してBでは、「狡猾」で「陰険」といった否定的な描写がなされ、学生に対する敵意や朝鮮人への差別意識が強調されていた。その結果、金講師がT教授に対してより強い反発を示すことになるのである。しかしBのT教授像は、Aに比べると緻密に描かれてはいるものの、謎の部分が消えて、逆に単純化してしまったとも言えよう。

次にその他の登場人物のうち、校長と「セルパン」の女とおでん屋の女については、Aでは滑稽な描写がなされていることが確認された。これは前稿で述べたように、Aで主人公・金講師が滑稽に描かれていたことに符合するものである。作者は最初、この作品を喜劇タッチで描こうとしたのではないと思われる。

筆者は、前稿に引き続き本稿で、作品「金講師とT教授」について初出の《新東亜》版(朝鮮語)と《文学案内》誌掲載の日本語版(作者自訳)の比較・検討を試みたが、これは植民地下での二重言語による創作の相互影響関係に関連するものであり、朝鮮と日本の文学史の流れの中で、文体論の視点からさらに見直す作業が必要であると考えられる。すなわち、Aの説明的な表現や、素朴で戯画的な比喩を使うなどして滑稽に描く手法等は、古典文学をも含めた朝鮮文学史全体の流れの中で見ていく必要があると思われる。一方、Bは日本の読者を意識して書き直されたことが当然、考えられるが、技巧面(緻密で具体的な描写、動的な表現、視覚に訴える表現、会話体を使う手法等)では、日本の近代文学作品の影響を受けた可能性があるのではないだろうか。さらにBの日本語文をもとに朝鮮語文に直されたC(『兪鎮午短篇集』所収、1939.7、学芸社)は、Aと同じ朝鮮語文でありながら、Bの日本語文の翻訳調という文体的な位置づけが可能であろう。前稿で述べた<sup>37)</sup>ように、やや習作的なAに比べ、B・Cの方が作品としての完成度が高いと思われるにもかかわらず、朝鮮でAが定本化していった<sup>38)</sup>背景には、当時の朝鮮の読者にとってCよりAの文章の方が自然で受け入れ易かったという状況があるのかもしれない。このように作品「金講師とT教授」は、内容上の比較・検討だけでなく、両国のそれぞれの文学史的な展開様相を踏まえた上で、文体論的な視角からも再検討してみる価値のある格好のテキストであると言えよう。今後、大きな課題として考えていきたい。

## 註

- 1) 小説家、法学者。1929年、京城帝国大学法学部卒業後、同大助手、講師となり、その後、普成専門学校の教授として教鞭をとる一方、作家として活躍した。「解放」(1945年)後は、一転して法学者、政治家として活躍。1946年、高麗大学校法政学部長、48年、憲法起草委員、49年、高麗大・大学院長、52年、同大総長。また1960年には日韓会談首席代表を務め、68年には当時、韓国最大の野党であった新民党の総裁にも推戴された。
- 2) 朝鮮の代表的な月刊総合雑誌。1931年11月、新東亜社から創刊。編集兼発行人・梁源模、主幹・朱耀燮。36年6月、朝鮮総督府により、通巻59号で廃刊させられた。「解放」後の64年9月、韓国の東亜日報社から復刊。
- 3) 白川春子；兪鎮午の「金講師とT教授」について、平成11～13年度科学研究費基盤研究B(1)研究成果報告書『朝鮮近代文学者と日本』サナエ(制作)、2002年2月。本稿では以下、この拙稿を「前稿」と記す。
- 4) 前稿註1)参照。
- 5) 「金講師とT教授」のテキストについては、前稿p.81及び、前稿の註3)を参照。
- 6) 原文は朝鮮語。以下、原文の日本語訳はすべて筆者による。なお、便宜上、直訳調とした。
- 7) 原文の漢字は旧字体であるが、本稿では便宜上、略字体に直した。また旧仮名遣い等についても一部、改めた。
- 8) C(p.107)では「朝鮮人の先生はあんたが始めてだから」の部分が省略されている。
- 9) 前稿pp.88～89参照。
- 10) この部分については、C(p.112)は、「H課長の家へ入って行く路地を曲がろうとする瞬間、すぐ背後からせわしく歩いてくる足音が聞こえた。頭をくると回すとすぐ背後まで来たその人の顔とほとんどぶつかりそうになった。」(原文は朝鮮語。筆者訳。以下同様)(下線は筆者)とあり、下線部以外はBよりもAでの表現に近い。
- 11) C(p.114)では「いつもの沈着な態度を回復して怒ったような表情をしていた。」となっている。
- 12) C(p.115)では「高笑いをしてから…(中略)…今度は陰気に目を細めた。」となっている。
- 13) 「ウキスキーを注文した。」が繰り返されるのは、印刷ミスであると思われる。ちなみに、C(p.116)では繰り返さない。
- 14) C(pp.119～120)では「同じドイツ語の教師であるから自分に関係づけて考へてみる外なかつたが」の部分が省略されている。
- 15) 前稿、p.93参照。
- 16) C(p.146)では「その時、隣の部屋に通じるドアが開いて、H課長夫人がお茶を持って入って来た。つづいて夫人の背後には、いつもと同じように春の波がちらちらするように顔全体ににこにこ微笑を浮かべたT教授が応接室へ入って来た。」となっている。
- 17) C(p.96)では「二つの頬がべこんとへこんだ顔が威厳がないので、かなり心易く話をすることができた。」となっている。
- 18) C(p.96)では「殖民地での」の部分が省略されている。
- 19) 註1)、前稿、註18)参照。
- 20) 前稿、註15)参照。
- 21) C(p.121)では「出稼ぎ」の部分が省略されている。
- 22) C(p.131)では、「民族的な偏見」という表現はなく、「理由のない蔑視と敵意」という表現に変えられている。
- 23) C(p.109)では、「また彼自身日本留学時代から嫌ひでもあつた」の部分が省略されている。
- 24) C(p.122)では、「日本人学生」は「内地人学生」に、「ドイツの左翼文学」は「ドイツ新興文学」に変えられている。「左翼」から「新興」に変えているのは、当局の検閲が朝鮮で、より厳しかったことを反映していると考えられる。
- 25) 前稿、pp.90～92参照。
- 26) 「聞いていると」は「開いていると」の印刷ミスであると思われる。C(p.122)では「開いていると」になっている。
- 27) C(p.122)では「障子」は「戸」、「温突」は「部屋」になっている。
- 28) 「××」は『韓国短篇文学全集』2(白水社、1958年、p.24)以降、「弾圧」という語になっている。「解放」(1945年)後のテキストについては、前稿、註3)参照。
- 29) C(p.124)では、「中でも日本人学生たち」の部分が省略されている。
- 30) 「学生」は「学校」の印刷ミスであると思われる。C(p.124)では「学校」になっている。
- 31) C(p.145)では、「朝鮮統治の役人が××主義者を学校に入れてそれでいいといふのか」の部分が省略されている。
- 32) C(p.145)では、「君たち朝鮮人の立場に」の部分が省略されている。
- 33) 「アラセンセ。イラッシュアイマシ。スイブン オヒサシブリネ」の部分は原文はハングルで日本語の音を表記してある。

- 34) 「家」とあるのは、朝鮮語の「집」(「家」, 「店」の意)を直訳した日本語ミスと思われる。C (p.114)では、「술집」(「飲み屋」, 「酒場」の意)となっている。また「M町の」は省略されている。前稿, 註22) 参照。
- 35) 「東京は芝田村町育ちだといふモダン女」は, C (p.114)では「やせた東京女だというモダン女性」になっている。
- 36) C (p.118)では、「貸座敷や」と「その道の通人だけが来るところらしく,」の部分が省略されている。
- 37) 前稿, p.94 参照。
- 38) 前稿, 註3) 参照。